あいのその　2024年2月号

「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」

（ペトロの手紙Ⅰ　4章10節）

愛の園保育園　042-325-1045

私たちは自己紹介や自分のアピールをするとき、趣味や特技について話すことがあります。一般的な履歴書にもそれを書く欄があります。それは、ただ自分のことを他者に知ってもらうためだけではなく、そのことによってあまり知らない人とでも共通の話題が生まれたり、会話を弾ませたりできるきっかけにもなるでしょう。

聖書にはしばしば「賜物」という言葉が出てきます。「賜物」を辞書で引いてみると、「①天や神からたまわったもの。いただいたもの。②他者から受けた恩恵。③よいことや試練などの結果与えられた成果。」と記載されています（三省堂『大辞林』より）。聖書に登場する場合は専ら①の意味であり、それは「神から恵みとして一方的に人間に与えられたもの」というニュアンスの言葉です。今月の聖句は、ある教会に送られた手紙に記された一節ですが、古代の教会内では、集う人の間でそれぞれに与えられた役割や働きの有無、得手・不得手による優越や蔑みによって溝がありました。そこに向けて著者は、できる働きや得意なこと、上手なこと、他者に比べて誇れるようなことは、人それぞれみな違うものだ。あれはうまいけどこれは下手だ、これは得意だけれどもあれは苦手だ、それが私たちではないか。皆が皆、同じ働きをするわけではない。あれもこれもできるわけではない。お互いが欠けを補い合い、助け合いながら共に生きることこそ、神に生きる者としての姿ではないか、と教えました。そこにはその主張の根本には、一人ひとりに与えられた能力や特技、志向などは、その人自らが生み出したものではなく、ただ神から「賜物」として与えられたものに過ぎないのだから、という思いが強くあったのです。

聖書によれば、私たち人間はすべて神によって創られました。しかし神はロボットを作ったのではありません。神に都合のいいように、便利に均一に働く者としてではなく、意思と感情を持った自由な者として人間は創られたのです。だから時に、人間同士ぶつかりもすれば、優越や卑下の思いに生きるときもあるでしょう。しかし、私たちは誰もが皆、それぞれに与えられた「賜物」によって、生きているのです。私たちは、いのちの創り主である神さまから、それぞれに適した、ふさわしい「賜物」を与えられている。その限りない神の恵み、神の愛に応えて、自分のできることを一所懸命、努めていく。それが、私たちが他者と互いの違いを認めつつ、共に生きる道なのです。

（牧師　西脇　正之）